



2022年9月15日放送

印象に残る症例①

風邪の漢方処方

ラファ・クリニック 院長 正木 稔子

風邪といえば、麻黄湯・葛根湯ですが、ちょっと変わった処方をご紹介します。本題に入る前に、私の漢方体験談をお話したいと思います。私が女子高生の頃。生理痛がかなりひどく、解熱鎮痛剤を服用するのが常でした。ある日、薬剤師である父の勧めで漢方薬を飲んでみることにしました。桂枝茯苓丸という漢方です。「生理の2週間前から飲みなさい」という指示でしたが、生理痛はたかが2日くらいなものでして、長く服用することが大変面倒でした。ところが、服用した月の生理痛が、皆無になったのです。驚きました。

それから数年経って医者になってから、産婦人科に受診し「生理痛の漢方をください」とお願いしたら当帰芍薬散を出されました。これが全く効かなかったんです。その後、桂枝茯苓丸に戻してみるとよく効いたのです。これは、産婦人科の先生が「証」の立て方を間違っていたということであって当帰芍薬散は生理痛には効かないという意味ではないので誤解がないようにお願いします。私は実証のため、桂枝茯苓丸が合っていたのです。当帰芍薬散と桂枝茯苓丸は、同じ効用が書いてあるのに、どうしてこうも効きが違うのか不思議に思いました。このことがきっかけで私は漢方薬に興味を持ち始めました。

さて、症例です。

43歳女性

昨日から、元々あった腰痛が強くなり、背中も痛む。体の置きどころがない感じ。クーラーに当たるのが嫌だと感じる。だるさはなし。体温は36.5度でした。

咽頭発赤、鼻の所見などなし。

その日、麻黄湯を処方しました。2時間おきに内服するように指示。

お近くの方でしたので、翌日も来院されました。2時間おきに内服したが症状が改善しない。「クーラーに当たりたくない」という訴えが強いため、麻黄附子細辛湯に変更しました。

1服したところで、体がほんわかと温かくなり、汗が出てきました。麻黄湯では発汗しなかったと言います。その時の体温は37.5度。

2時間後に麻黄附子細辛湯をもう一服。その2時間後にもう一服。その翌日です。36.0度に解熱し、今度は冷えとだるさが続くため、真武湯を処方しました。

真武湯を3回内服したところで症状は消失したため、廃薬としています。

以上が症例なのですが、誤治と言って誤って治療したために、病期が進行した症例です。

これ、実は私自身なんです。自分のことは客観的な視点が持てないので、なかなか難しいですね。

漢方には古典というものがあり、常にそこに戻って基本に忠実に処方していくことが大切です。私もよく古典は読み返しています。三大古典があり、「神農本草経」「黄帝内経」「傷寒論」というものです。これは基本中の基本ですので、ぜひ先生方も手に取ってみてください。大変難しいのですが、臨床をやりながら何度も読んでいくとだんだんわかってきます。

風邪の進行の仕方は傷寒論において、6つのステージに、ステージ分類されました。六病位と名付けられています。今風に言うと、ステージ分類ですね。

太陽病期、少陽病期、陽明病期、太陰病期、少陰病期、厥陰病期の6ステージです。

傷寒論ができたのは、後漢の時代と言われています。この時代は病院もなければ、抗生物質もなかったのです。風邪でもひこうものなら命取りになる可能性があった。だから、必死に風邪を治していたのです。その集大成が傷寒論。今、必死に風邪を治療しているのと同じですね。今も昔も変わらないのです。今こそ、漢方の出番なわけです。後漢の時代に出来上がった処方はかなり多く、風邪と言えど症候群ですから症状のバリエーションが広いのです。それぞれの症状に対応して多くの処方が生み出されていきました。

話を六病位に戻します。太陽病期、少陽病期、陽明病期のように「陽」が付く病期では邪気と正気が激しく戦うため熱証を呈します。一方「陰」が付く病期、つまり太陰病期、少陰病期、厥陰病期では正気が衰えているので、邪の内臓への侵入を許してしまい、冷えを伴います。漢字のイメージでなんとなく想像がつくのではないかと思います。麻黄湯や葛根湯は太陽病期のクスリです。

今回の症例では「クーラーに当たりたくない」という冷えを強く思わせる病状でした。事実、麻黄湯では改善せず、麻黄附子細辛湯で改善、つまり少陰病期に陥っていたと思われます。

通常、太陽病期から進行して行きますが、ご年配の方は体力がないために邪の侵入を許してしまい、突然少陰病期から始まることが多いです。「少陰の直中」という言葉があり、いきなり少陰病から始まるということもあります。症例は43歳ではありますが、体力が低下していると思われます。私は自分で体力があると勘違いしていたんですね。体力がないなんて認めたくなかったのかもしれませんが。常日頃から冷え性というのもポイントになります。

では、麻黄湯を使うのか、麻黄附子細辛湯を選ぶのか、見分けないと いけませんね。見分け方は脈診です。脈が強いのか弱いのか、それで見分けて下さい。たくさんの方の脈診をすれば分かるようになります。高熱が出ているときは脈が強く打ち返してきて、早い傾向があります。しかし、麻黄附子細辛湯を選ぶ症例は高熱を出すことができず微熱止まり、脈も弱々しく、叩き返してくるような脈ではないのです。

「クーラーに当たりたくない」「身の置き所がない」というのもキーワードになります。これらを総合して考えて、麻黄湯なのか麻黄附子細辛湯なのかを考え、選択して処方します。

風邪は時間単位で進行します。翌日になってしまうと病期が進行しています。一刻も早い対処が肝要ですので、体力に合わせて麻黄湯か麻黄附子細辛湯を患者さんに持たせておいた方がいいのではないかと思います。今回の症例でもそうですが、最初麻黄湯だと思って誤治（誤って治療）したもので、初診翌々日には邪が裏に入り込んで、普段の体温に比べ低くなり、36.0度。少陰病が進行すると厥陰病期になり、これは死に至る段階でもあります。早く対処することで、表、つまり体の表面の症状で留めて、邪を追い出せるといいですね。裏というのは内臓で、真武湯を使う段階では腹痛や下痢を呈していることがあります。

一般的に、麻黄湯や葛根湯は大変有名で先生方も処方されたことがあるのではないかと思います。太陽病期から始まった場合には、麻黄湯・葛根湯・桂枝湯などを使いますがこれは発症当日、もしくは2日目まで。麻黄湯・葛根湯・桂枝湯は症状で使い分けます。ここで邪を追い出せないと、その翌日にはだいたい微熱になり少陽病期になります。少陽病期は柴胡という生薬が入った「柴胡剤」という処方を使います。例えば、小柴胡湯、柴胡桂枝湯、小柴胡湯加桔梗石膏などです。患者さんのお薬手帳を見ると「葛根湯7日分と西洋薬」というセットをよく見かけます。先生方には柴胡剤をセットで処方していただくようお願い致します。

また、傷寒論には養生法も記載されています。養生とはセルフケアのことです。葛根湯の条文には「体を覆ってわずかに汗が出るようにせよ」と書かれています。また桂枝湯の条文には、「熱い粥をすするように」と書かれています。よく患者さんに「風呂には入っていいのですか？」と聞かれます。汗を出させるための処方ですので風呂に浸かるなり汗を出させることも指導に取り入れるといいと思います。

風邪の漢方の処方の仕方が少し広がりましてでしょうか。皆様の診療のお役に立てると幸いです。